

山村留学の実践に関する研究

—暮らしの学校「だいだらぼっち」の事例—

赤羽 克子 佐藤 可奈

要旨

わが国の学校教育は、「知識重視型」と「経験重視型」との間で度々揺れ動いてきたという歴史がある。

「経験重視型」の学校教育では「関係を生きる学力」をどのように育てるかが課題となる。本稿は、「経験重視型」教育の一つの事例として長野県泰阜村の山村留学を取り上げ、自然と向き合う不便な暮らしの中で、様々な課題と対峙し、それらを乗り越えていくための知恵と感性を磨く教育システムを検討する。

長野県泰阜村の山村留学、暮らしの学校「だいだらぼっち」は、子どもたちが都市部から1年間にわたり泰阜村に移り住み、宿舎で生活しながら、歩いて30分の山の中腹にある地元の小中学校に通い、「地域の教育力」を生かした体験活動を行う。「だいだらぼっち」の活動は、子どもたちの主体的参画を重視したフリープログラムが中心であり、地元の農家から農地を借りて耕作を行うほか、地元の達人から暮らしの技を学ぶのである。

1. はじめに

わが国の学校教育は、「知識重視型」と「経験重視型」との間で度々揺れ動いてきたという歴史がある。

平成2（1990）年頃から団塊ジュニア世代（1970～1980年代生れ）の詰め込み教育、管理教育、受験戦争などが原因とされる校内暴力、いじめ、不登校、落ちこぼれなど学校教育をめぐる病理現象が多発し、深刻な社会問題となった。これらを背景に、平成8（1996）年7月、中央教育審議会は「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」（第1次答申）を発表した。この答申は、子どもたちの現状を、ゆとりの無さ、社会性の不足と倫理観の問題、自立の立ち遅れ、健康・体力の問題にあると指摘し、その上でこれからの社会に求められる教育の在り方の基本的方向として、全人的な「生きる力」の育成が必要であると結論づけた。この答申は「生きる力」とは、①自分で課題を見つ

け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力、②自らを律しつつ、他人と協調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性とたくましく生きるための健康や体力の二つの要素であるとする。この提言を受けて、学校週5日制など「ゆとり」教育が始まったとされている。

平成9（1997）年6月、中央教育審議会は、第2次答申を発表した。この答申は、これからの教育は、「ゆとり」の中で「生きる力」を育むことを目指し、個性尊重という基本的な考え方に立って、一人ひとりの能力・適正に応じた教育を展開していくことが必要であると指摘した。

ところが他方で、OECD（経済協力開発機構）のPISAやIEA（国際教育到達評価学会）のTIMSSの結果などから「学力低下」が問題とされ、「学力の危機」をめぐる議論が活発に展開されるようになった。

平成17（2005）年に中山文部科学大臣は中央教育審議会に学習指導要領の見直しを指示した。平成19（2007）年の中央教育審議会答申は「ゆとり教育」による学力低下を認め、授業時間の増加、理数系、英語の授業日数の増加を提言した。平成20（2008）年には文部科学省は中央審議会答申に沿い、授業時間を全体で3～6%ほど増加させた学習指導要領を発表した。これはまさに「経験重視型」から「知識重視型」への転換であった。

岩川直樹は、これまでの「学力」の概念について、「分数の計算や漢字の書き取りの個人的所有量の多い人間が高い学力をもった人間とされ、それらの知識や技能が具体的な関係の中でどのように生かされるかは問われない『所有としての学力』であった」と指摘し、また「学ぶ力としての学力は、教える側と学ぶ側の関係の中で成立し、関係の中で生まれるものであるとともに、新たな関係の中に生かされ、その関係を豊かにするためにこそ用いられるべき」として「関係を生きる学力」という概念を提起した。その上で、『「学力」あるいは従来の『基礎学力論』に一貫して

欠けている視点は、『学力』を関係の中で捉えなおす視点である」こと、「教育の競争システムは『所有としての学力』を動機づけることはできても『関係を生きる学力』を育てているとは決していけない」と論じている¹⁾。

では「関係を生きる学力」はどのように育つのか。その一つのモデルの「学校」が長野県泰阜村にある。天竜峡左岸の斜面に散在するこの村には、関東や名古屋方面からやって来た小中学生約20人が山村留学している。山村留学の拠点宿舎が、暮らしの学校「だいだらぼっち」である。運営するNPO法人グリーンウッド自然体験教育センターは、この地で20数年の実績がある。山村留学の子どもは1年間にわたり泰阜村に移り住み、宿舎で生活しながら、歩いて30分の山の中腹にある地元の泰阜南小学校、泰阜中学校に正規の生徒として通い、「地域の教育力」を生かした体験活動を行う。暮らしの学校「だいだらぼっち」での活動は、子どもたちの主体的参画を重視したフリープログラムが中心であり、地元の農家から農地を借りて耕作を行うほか、地元の達人から暮らしの技を学ぶ。

本稿は、子どもたちの「関係を生きる力」を育てる一つの事例として長野県泰阜村の山村留学を取り上げ、自然と向き合う不便な暮らしの中で、様々な課題と対峙し、それらを乗り越えていくための知恵と感性を磨く教育システムのあり方を検討する。

2. 山村留学とは

山村留学とは、「都市部の小中学生が長期にわたって親元を離れ、地元の学校に通いながら自然豊かな農山漁村で生活をする体験学習制度」をいう。土・日曜を利用しての「ミニ山村留学」、夏休み・冬休み・春休みを利用しての「短期山村留学」、1年間単位で実施する「長期山村留学」があるが、一般的に「長期山村留学」を山村留学としている。異年齢の子どもたちとともにする生活体験を通して「生きる力を育む」ための教育実践活動である。

平成20年度「全国山村留学実態調査」によれば、山村留学を実施しているのは、26道府県、97市町村に及び、小学校121校、中学校54校である²⁾。道府県別の受け入れ人数は多い順に、北海道151人、鹿児島県116人、長野県104人であり、留学生の出身地は、東京都84人、大阪府81人、愛知県47人、神奈川県46人、福岡県44人となっている。参加者は、小学生422人、中学生255人の計677人、男子383人(56.6%)、女子273人(40.3%)、不明21人(3.1%)で、参加者累計(昭和51年からの延べ人数)は15460人である。

近年、参加者数は800人前後で推移していたが、平成19年度に大幅に減少し(小学生140人、中学生23人)、平成20

年度も小学生の減少が著しく、受け入れ体制のあり方が大きな課題となっている。

山村留学生の居住タイプを四つに分類して、各々の人数割合をみると、「里親タイプ(地元の農家に下宿)」26%、「寮タイプ(専門指導員のもと子どもたちが共同生活を送る)」32%、「里親と寮の併用タイプ」16%、「家族タイプ(家族とともに地元が用意した住宅で生活する)」26%であるが、いずれにせよ山村留学の目的は地元の学校に通い、地元の子どもと一緒に生活を送り、さまざまな自然体験や農山漁村の暮らしを体験することで、子どもの「生きる力」を育むことを目的としている。

3. 山村留学生受け入れの土壌

(1) 泰阜村の位置

山村留学・暮らしの学校「だいだらぼっち」は、長野県下伊那郡泰阜村にある(図1参照)。

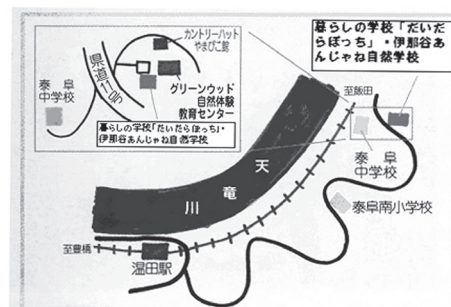


図1 暮らしの学校「だいだらぼっち」・伊那谷あんじゃね自然学校の位置

泰阜村は、長野県の南部、天竜川の東側に位置し、平成21年9月現在の人口1923人、世帯数746、高齢者733人、高齢化率38.1%である。村の総面積は64.54km²、林野率87%の山村であり、宅地は1%にも満たない地域である。この地域は「伊那谷」と呼ばれ、辺りは山々に囲まれ、標高は300～500mとその差約200mの急峻な土地に集落があり、「自然以外に何も無い」といわれた土地で、人々は厳しく豊かな自然と直接向き合いながら共存し、生活の知恵を生み出し、自然への畏怖の念を抱き、人間同士の思いやりを築き上げてきた。泰阜村の暮らしそのものが「地域財」である(写真1)。

現在19集落のうち5集落が「限界集落」であり、村の存続自体が危ぶまれる中、財政を削減するために、村の職員の削減や助役を廃止したほか、市町村合併はせず、独立した村政を選んだことでも知られている³⁾。



写真1 泰阜村の集落の様子

(2) 学校美術館

泰阜南小学校には、昭和5（1930）年に建設された学校美術館がある。この学校美術館の設立の背景としては、アメリカに端を発した世界恐慌によりわが国では政府の金解禁が行われ経済は混乱し、農村を壊滅的な状況に追い込み、泰阜村でも養蚕、米、木材、炭などの現金収入が5割減となり、児童が貧困のために学校を休んだり、弁当を持参できない「欠食児童」が出てきたことに端を発する。

一方、村の財政も逼迫して村の教職員に給料が支払えなくなった。そこで村は教職員の俸給1割の寄付を求め、これを財政に投入するという要請を行った。ところが当時の校長は、「教員の俸給の1割寄付を現下の財政に投入してもその効果は極めて少ない。この寄付金をもって貧困にあえぐ児童生徒が如何に貧しくとも貪慾な人間にならざるための教育に直接投入するならばその効果は大きい」として美術鑑賞による情操教育を提案し、学区内全般に賛同と協力を得て美術館建設に着手した。基金は、泰阜南小学校の教職員13人の俸給1割の金5070円50銭であった。美術品の購入は、教職員が寄付した基金をもとに、児童の寄付金に求められた。購入作品の多くは、学校美術館の趣旨に賛同して寄贈され、基金はその礼金にも当てられた。昭和20年頃までに、日本画約20点、洋画約14点、書13点、彫刻1点など約50点が集まった。昭和46（1971）年に村営の「泰阜村立学校美術館」となり、今日に至っている⁴⁾。泰阜村には歴史的に、「貧しいけれども、心は貧しない」「教育を愛する気風」などが生まれ、都会からの山村留学生を受け入れる土壌が存在する。

(3) 中国帰国子女教育

泰阜村は、昭和初期に人口が急増し、世界大恐慌の影響を受け、当時は養蚕を農業の基幹としていたが、その養蚕が壊滅的な打撃を受けた。村の農業だけでは村民の生活を

賄うことができず、当時の国策であった「満州農業移民」に生活困窮の打開策を求め、昭和13（1924）年に村をあげて満州開拓に送り出したという歴史がある⁵⁾。当時1200人余りが満州開拓に加わり、「満州泰阜分村」を建設したが、第二次世界大戦の敗戦で、600余人が命を落とし、多くの残留孤児を生み出した。

泰阜村は、昭和47（1972）年9月の日中国交正常化後に中国帰国子女に対して積極的な援護策を実施した。泰阜南小学校と泰阜中学校に専任講師を置く特別学級を開設し、昭和50年から平成元年まで文部省の帰国子女教育研究協力校として中国帰国子女教育を実践した。一方、親に対しても家庭訪問、日本語教育などの社会学級も開設するなど泰阜村の帰国子女教育の実践は、早い時期から行われ、「泰阜方式」として市町村関係者から注目を浴びた。この実践で成果を上げた泰阜村は、地元の子どもと帰国子女がともに「暮らすこと」を豊かさとして捉えている。この実践は都会からの山村留学生受け入れの体制づくりにも役立った。

4. 泰阜村の山村留学

(1) 山村留学受け入れの始まり

泰阜村の山村留学は、昭和60（1985）年頃から行われた2泊3日のキャンプ活動（30人程度が参加）が始まりである。この頃は、校内暴力、いじめ、子どもの自殺など学校病理現象が多発し、社会問題化した時期であった。また都市農村を問わず「外遊びをしない、できない」子どもたちが目立つようになってきていた。このような時代背景の中、子どもが管理されることなく、伸び伸びと育つ場を作り出す必要性が論じられていた。

泰阜村で行われていたキャンプ活動は、夏休みに子どもたちが「自分で選び、自分で作り上げる」ことを大切にされた「自由キャンプ」であった。このキャンプが、2泊よりも3泊、3泊よりも1週間、1週間よりも1ヶ月となり、最終的に1年間となった。

1年間のキャンプ活動は、自分たちの手で家を作って、手元にあるもので暮らし、食べるものもできるだけ自分たちで作る「自立自営」「夢を持ち寄れる場」「教育の原点」「学校の外の教育」をテーマに、昭和61（1986）年、泰阜村の農家を借り受け、4人の留学生の受け入れから始まった。

(2) NPOグリーンウッド自然体験教育センター

昭和61年に始まった山村留学は、毎年小中学生を20名程度受け入れ、平成5（1993）年に任意団体「グリーンウッド遊学センター」を立ち上げ、平成13（2001）年にNPO法人化（NPO法人グリーンウッド自然体験教育センター）

し、自然体験教育活動の専門組織として15人の常勤スタッフを擁し、全スタッフが地域住民となって暮らしに根づいた活動を展開している。

グリーンウッドは、「ふるさとの暮らしから学ぶ」を教育理念としている。山村の暮らしは、「生きる基本」を学ぶための優れた「学校」である。日本の農山漁村には、その風土によって作り出された独自の「暮らしの文化」があり、「知恵」が豊富に存在する。「暮らし」の持つダイナミズムをあらためて「学習財」として捉え直していくことで、「心の豊かさ」「生きる力」を育てていけると考える。暮らしの中の学びを丁寧に抽出し、総合学習プログラムとして構成したものが自然体験教育活動である⁶⁾。



写真2 だいだらぼっちの家

5. 暮らしの学校「だいだらぼっち」

(1)「だいだらぼっち」

「だいだらぼっち」とは、山村留学生在が1年間暮らす「宿舍」を指す。「だいだらぼっち」は屋号で、地元の住民からは「ぼっちの衆」と呼ばれ、一つの家と理解されている。

山村留學生は、4月に集まり、翌年3月まで1年間にわたって親元を離れ、子どもたちを支える相談員（常勤スタッフ15人）と生活を共にする。入学条件は、山村留学に参加する子ども自身が、1年間逃げ出さない、仲間と一緒にここで暮らすという「やる気」であり、これがスタッフ（大人）との最初の約束（=契約）でもある。

子どもたちは、ここで何を学ぶのか。「だいだらぼっち」の理念は、「暮らしから学ぶ」のであり、自分でやらなければ暮らしていけないことを第一に学ぶ。ここでは炊事、洗濯、掃除、風呂を焚く（薪で）など、日々の暮らしに関わる仕事の殆どを子どもたち自身の手で行う。

もうひとつの「暮らし」は、子どもと大人を含めた共同生活である。30数名が同じ屋根の下で暮らせば、日々何かしらのトラブルも発生する。共同生活では、「ぶつかりあう。話し合いで解決する。そこから学ぶ」を大切にしている。「だいだらぼっち」は、4月に集まった瞬間から話し合いが行われる。1年間のスケジュールは何も決まっていない。明日の食事を誰が支度するのか、誰が風呂を焚くのか。自分たちで話し合っただけでルールや当番を決めなければ、暮らしていけない。話し合うことは子どもたちにとって、必然となる。家族以外の他人との暮らしの中で、自分と他者との違いに気づき、様々な価値観を共有する場である（写真2）。

泰阜村には、年に4回ほどの村総出の草刈りや溝掃除などを行う「結い」（ゆい）があり、一戸ごとに一人が参加す

ることになっている。「だいだらぼっち」からは20名が参加し、作業をしながらの付き合いは子どもたちにとって「地域学習」となっている。

(2)伊那谷あんじゃね自然学校

泰阜村で暮らす小中学生を対象に、泰阜村内の自然や文化、歴史、産業、暮らしの営みを学ぶ地域に根ざした、自然体験・生活体験・地域体験教室が、月に1～2回開催される。この体験授業が「伊那谷あんじゃね自然学校」(図2)である⁷⁾。

この「学校」設立は、平成14（2002）年の学校週5日制の施行がきっかけである。山村では殆どが共働きのため、子どもだけを家に残すことへの不安の声が上がり、村が土曜日の受け入れをグリーンウッドに依頼したのが始まりで、その後泰阜村とグリーンウッドとの協働で設立された。

この学校には山村留学の子どもも地元の子とも共に参加する。「あんじゃね」とは、伊那谷の方言で「案じることはない」「大丈夫」という意味であり、伊那谷は豊かな自然と生活文化が根づいていて、人と自然が共生する「安心社会」実現の願いが込められている。

村の住民が講師となり、炭焼き、養蚕の飼育、コンニャク作りなど村の文化を伝える。開講当初は講師の引き受け手はなかったが、徐々に地元住民も子どもたちとの活動を通じて村の文化を伝えることに意義を見出し活動の輪が広がっていった。平成17（2005）年に講師陣のデータベースができ、平成19（2007）年には活動内容を提言する企画運営会議が立ち上がり、平成20（2008）年には「あんじゃね自然学校」を支えながら大人たち自身も学ぶ「あんじゃね支援学校」も始まった。

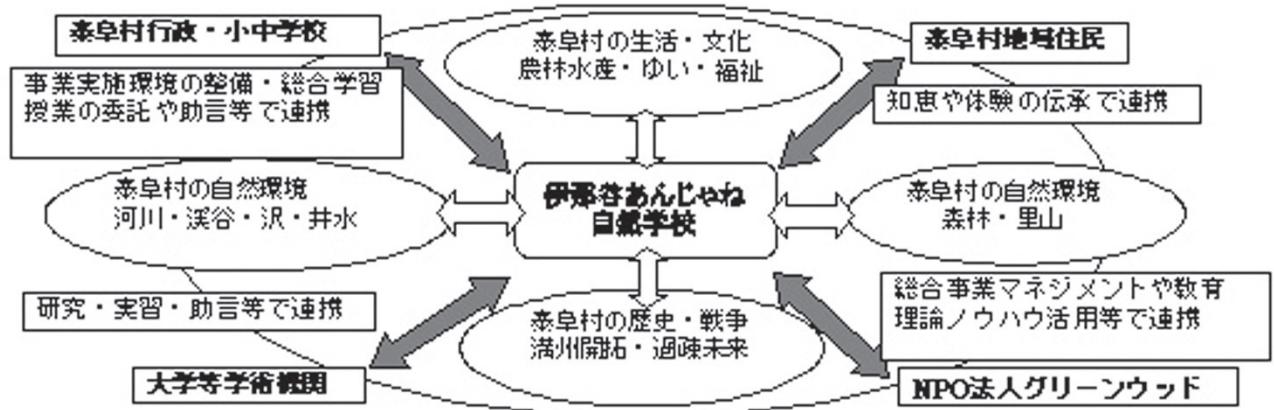


図2 「伊那谷あんじゃね自然学校」運営概念図

松島貞治村長は、「山村の行政を預かりながら、いつも山村コンプレックスとの戦いであったような気がする。豊かな長寿社会を作り上げた人類が、その向こうにユートピアがないことに気づき始めたように思う。山村の生活こそ、エコ社会の見本であり、人間の心を満たす持続可能なライフスタイルであった。こんな小さな山村の試みではあるが、あんじゃね自然学校や支援学校への取り組みは、これからの環境社会構築への足がかりをつくったように思う」と語る。

(3)「信州こども山賊キャンプ」

「信州こども山賊キャンプ」は、平成5（1993）年から本格的に始まった。このキャンプ活動の目的は、泰阜村の自然・地域を丸ごと「体感」することを通じて、様々な価値観（＝多様性）を認める「豊かでしなやかなこころ」を育むことにある。

例年7月中旬から8月下旬にかけて、入門的な内容からリピーター向けまで2泊から11泊までの約30コースで行われ、山村留学生も参加する。平成20（2008）年度の子どもの定員は1100人とボランティアスタッフ（大学生など）350人であり、子どもは参加受付開始から申し込みが殺到し、初日だけで約半数以上が埋まった⁸⁾。

このキャンプは、村内の村営「左京キャンプ場」で行われ、キャンプ活動では野菜の大半を村内産のものを利用し、全部買い取ることを条件に冬場から品目を指定して栽培を依頼している。

キャンプ活動の内容は、沢登り、川遊び、工作などだが、内容や規則、食事や掃除の分担に至るまで子どもたちとスタッフの相談で決める自由な雰囲気が子どもたちに好評で、例年リピーターの参加者が全体の4割を占める。

このキャンプの特色は、泰阜村の自然と人が持つ教育力を生かして子どもたちの自らの努力と仲間の励ましあいによって「生きる力」を獲得することである。参加者全員の「山賊会議」やグループごとの「作戦会議」を通して、話し合いで物事を決め、自然との共生をともなった「関係に生きる学力」を身につける。

もう一つの特徴は、大学の実習科目単位履修として教育者を目指す人、山賊キャンプ経験者のボランティアなど全国各地から集まった300人を超すボランティアリーダーによる指導体制である。ボランティアは子どもとのふれあいを通して、リーダーとしての資質を養い、子どもたちはボランティアとの交流で「関係の大切さ」を学ぶことができる。

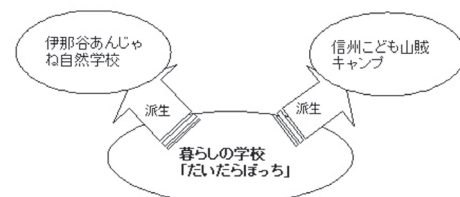


図3 だいだらぼっち、キャンプ、自然学校の関係

6. おわりに

泰阜村の山村留学、暮らしの学校「だいだらぼっち」は、子どもたちによる1年間の自立と共生のコミュニティを形成している。現代社会では、対人関係の「望ましい関係性」が求められるが、それは従来の「知識重視型」教育では育ちにくいと考えられる。

「だいだらぼっち」のプログラムは、自らが自らの主体性と協調性を引き出し、未来を生き抜く「たくましさ」を育む土壌をつくる。子どもたちの自覚と責任で運営される

プログラムで、それぞれの個性を認め合いながら合意形成を重ねて「段取り」を決め、現代ではかなり不便な手間隙のかかる暮らしを实践する。この学びの内容、方法、場所、スタッフなどすべてにおいてこれまでの教育のあり方を根本的に問い直す「経験重視型」教育の試みといえる。そこに「関係を生きる学力」が育つものと考えている。

謝辞

本稿を執筆するに当たって、泰阜村村長松島貞治氏、NPO法人グリーンウッド自然体験教育センターの方々にお世話になった。記してお礼申し上げます。

注)

- 1) 岩川尚樹「関係を生きる力 他者に出会いに行く学び」、岩川尚樹・汐見稔幸『学力を問う』草土文化 2001年 pp.180-190.
- 2) NPO法人山村留学協会「平成20年度山村留学実態調査報告書」2008年
- 3) 「限界集落」とは、集落全体の人口の中で65歳以上が50%以上を占める集落を指す。
- 4) 泰阜村誌編さん委員会『泰阜村誌 下巻』泰阜村総務課 昭和59年
- 5) 七〇年の歴史と記憶編集委員編『満州泰阜村分村』不二出版 2007年
- 6) 資料暮らしの学校「だいだらぼっち」NPO法人自然体験教育センター
- 7) あんじゃね自然学校の活動は、平成12年に始まり、平成20

年度には文部科学省委託事業「青少年体験活動総合プラン」として実施し、これまでの実績等と合わせて活動が評価され、財団法人「あしたの日本を創る協会」が主催する“あしたのまち・くらしづくり活動賞”の振興奨励賞を受賞している。

- 8) 「信州こども山賊キャンプ」は、林野庁、国土交通省天竜川上流河川事務所、長野県教育委員会、泰阜村教育委員会などの後援を受けて実施している。

参考文献

- ・岩川尚樹・汐見稔幸編『学力を問う』草土文化 2001年
- ・NPO法人全国山村留学協会「平成20年度全国山村留学実態調査報告書」2009年
- ・國分紘子『山村留学と生きる力』教育評論社 2006年
- ・佐藤学『学力を問い直す—学びのカリキュラムへ—』岩波書店 2007年
- ・信州こども山賊キャンプ事務局「08夏の信州こども山賊キャンプ事業報告書」NPO法人グリーンウッド自然体験教育センター 2008年
- ・中央教育審議会「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について—子どもに『生きる力』と『ゆとり』を—」1996年
- ・中央教育審議会「新しい時代を切り拓くために—一次世代を育てる心を失う危機—」1998年
- ・沼田奈央美、辻典子編「やすおかあんじゃね学校07年度事業報告書」NPO法人グリーンウッド自然体験教育センター 2008年
- ・沼田奈央美、佐藤洋平他編「やすおかあんじゃね学校08年度事業報告書」NPO法人グリーンウッド自然体験教育センター 2009年
- ・松島貞治、加茂利男『安心の村は自立の村』自治体研究社 2004年